

## お母さんのお弁当

嶋田 しまだ 夏海 なつみ

元気がとりえな私。学校を休んだことが一度もなかった。そのはずなのに、授業中だんだん息苦しくなつて頭がぼんやりしてきた。病院に行ったらインフルエンザだつて言われた。校外学習は四日後。学校に行つていいのは五日休んで六日目から。校外学習には行けなくなつた。

私の前と後ろの席の人は二、三日前からインフルエンザで休んでいた。でも、私は元気だから大丈夫だよ、そう思つていた。早退することになったと担任の先生が電話をするとお母さんは息を切らしてすぐに来てくれた。その日はずっと体中がほてつていてまるで熱いふるの中にいるような感じでもつらかつた。お母さんはずっとそばにいて手をにぎつてくれた。お母さんの手はほんわりと温かくてとても心地よかつた。気がついたときには朝になつていて、気分も楽になつていた。横を見ると、お母さんが私の手をにぎつたまま寝ていた。お母さんは私が寝た後もついていてくれたのだ。

「お母さん、ありがとう。」

私がそうつぶやいたとき、お母さんが目を覚ました。

「あら、先に起きていたの。気分はどう？」

「うん、良くなつたよ。でも、やっぱり校外学習きたかつたな……」

私が言うと、お母さんは何かを考えていた。そして校外学習当日。結局行くことができなかった私はすることがなかったので天井をじっとながめていた。

「なんでこんなときにインフルエンザにかかったんだらう。みんなと一緒にきたかったのに。楽しいだらうな。」

私は行けなかったことがとつても悲しかった。そんなことを思っていたとき、

「夏海、ご飯よ。」

お母さんがご飯を持ってきてくれた。私はお母さんが持ってきた物を見ておどろいた。お弁当だった。

「ほら、夏海校外学習行ききたがついていたじゃない。少しでも行った気分になってほしくてね。」

お母さんが作ってくれたお弁当はとでもカラフルで花型のにんじんやハートのウインナーなどが入ったかわいなお弁当だった。でも、一人で食べると思うと少しさみしいな、そう思ったとき、お母さんが私の横にすわった。

「私の分も作ったから一緒に食べよう。」

お母さんと食べたお弁当はとつてもおいしくて、うれしくなった。

「お母さん、大好きっ。」

私はお母さんの作ってくれたあのお弁当の味を忘れない。どんなときでも私のことを一番に考えてくれる、やさしいお母さんの作ったお弁当はだきしめられているときのような温かくて安心する味がした。私はもつとお母さんが大好きになった。私のことを大切に思ってくれるお母さんが。いつもありがとう、誰よりも大好きだよ。お母さん。